

会員のみなさまへ

桜の花に寄せて

会長 末 芳枝

東京に桜の花が咲き始めました。春の訪れを告げて居ります。日本はこの時期新旧の交代の時期であり、転勤、卒業そして、新入生、新入社員を迎える時でもあります。



当発声学会も現在の体制は5月31日を以って任期満了となります。

6月1日から、新体制のもと活動開始となります。米山文明理事長先生の体調が思わしくない事で2013年5月から実動を始めて、2014年には、創立50周年という記念すべき年を迎えました。半世紀に亘る声楽発声指導法研究会の活動は、日本学術会議の協力研究団体となり日本声楽発声学会と名称を改め、声楽家と音声生理学者・ドクターと共に研究を重ね、他の研究グループには無い、独特の道を幸せにも歩んで参りました。

海外で学び帰国された方々も多く入会され、新しい雰囲気も加わり研究の成果をあげてこられたと思います。

ヨーロッパの伝統ある芸術作品を歌う為には、その発声法を研究し、語学を学び、作品を解釈して歌うことは当然です。しかし同時に自国の芸術を理解し、研究を重ねて行く必要性は論ずるまでもありません。自国の芸術は、世界に誇れる民族の音楽であり、伝統芸術であり、独特のものです。海外で演奏する

時にこれ程安心して心の安らぎを感じつつ、心の赴くままに歌う事が出来る事を、海外で歌った経験のある歌い手であれば誰もが経験していると思います。留学時代リート・オラトリオ科の授業でも感じる事が、多くありました。発声はまだ難があっても、各国の学生が、自国の歌を歌えば、訴える感情表現と民族的な血は、発声の少々の難を乗り越えて、直接、聴衆に訴えて来るのでした。これは、まさしく血の流れだと感じた事でした。

桜の花は、ウィーンでも五月中旬、咲き誇る事を知りました。オーストリー国立音大のローテリンゲン通りの本校の出入り口から、地下鉄のカールスプラッツ駅を見ると遙か遠くに白く輝く一本の木が見えました。近づいてよく見ると、まぎれもない桜の花でした。1969年の春の事でした。留学して1年、全ての新しい環境に馴染めず疲労していた私の心を慰め、どんなに力づけてくれた事でしょう。花は力強く、花びらが厚く、雄々しく見える花の様子に驚きました。母国の桜とは全く異なる逞しい花々です。冬の厳しい寒さに耐えて力強く咲くたった一本のさくらの姿でした。

私は勇気と忍耐を与えられました。環境に順応し努力して、素晴らしい先生方から多くを学び成長して行きたいと。何度も何度も通い続けたウィーン、目的は、恩師の許で学び、講習会に参加し、リサイタルそして、コンサート、レコーディングと盛り沢山でした。

次の機会には、友と語り師を偲び、思い出の旅がしてみたい。教え子の本場の舞台での活躍もじっくりと鑑賞してみたいと望んでいる今日この頃です。



今期の理事の任務を終えるに当たって思うこと

副会長 川上勝功

一昨年、我らが日本声楽発声学会は、ようやく50周年を迎えることができました。50年という年月を“ようやく50年”と捉える方と、“早くも50年経ってしまった”と捉える方の両方が存在するのではないのでしょうか？



当学会の前身である「発声指導法研究会」が、城多又兵衛先生等を中心に発足した頃、私自身はちょうど芸大の学生でありました。

初期の頃は殆どが芸大の教授を中心に、多くの声楽の先生方が頻繁に研究会に参加されたと聞いております。

その後、柴田睦陸先生や須永義男先生を中心に学会を設立し今日に至っていることは皆様が良いご存知のことと思います。

その頃から、小田野正之先生や木下武久先生からお誘いを受け、学会の例会に顔を出すようになりました。ですから私はざっと数えてもかれこれ40年余り学会に身を置いて来たということになります。(そういう意味に於いて、私にとりましては“もう50年も経ってしまった”、感の方が今では強くあります。)

その後は、小田野先生、木下先生、宮原先生、丹羽先生等々の大先輩方から、多くのことを学ばせて頂いて参りました。

私の発声研究に関しましては、この30年、毎年のように、外国に足を運び(留学も含めて)学んできたことと、当学会の諸先輩の先生方、特に音声生理学研究のスペシャリストであられた米山先生から直接ご指導を受け、学んだことが全てといえると思います。

米山先生は、亡くなる数年前より体調を悪くされ、入退院を繰り返しておられましたが、その時に、「まだやり残したことが沢山ある」と、よく口にしておられました。「もう一冊本を書きたいんだ」とも言っておられました。今思えばさぞかし無念であったであらうと拝察いたします。

そして昨今の発声学会の中での騒動を天国からご覧になって、きっと嘆息をついておられることでしょう。「声楽家はバカばかりだから」とも良く仰っておられました。それをま

ともに受け止めて本気で腹を立てている方もおられましたが、一步退いてよく考えてみると「まったくその通りだなあ」と思わせられることもしばしばであります。

言ってみれば私も“声楽家”です。米山先生の仰る『バカの内の一』であると充分に自覚はしているつもりです。

さて、この3年間、理事を努めさせていただいて思うことは、何とか無事に年2回の例会と、夏季研修会を終えることができました。しかし予期せぬ大きな騒動に巻き込まれてしまい、健全な理事会運営が大きく振り回される結果になってしまいました。非常に残念に思っております。

あと任期は僅かですが、次の新しい組織が選挙によって生まれ、学会の正常な運営がなされることを心から願って、残された時間を他の理事の皆さんと力を合わせ、頑張りたいと思っております。

日本声楽発声学会 理事の大役を終えて

副会長 永井和子

1974年に本学会に入会してより41年間が経ちました。思えば1968年に本学会が設立されてより5~6年が経過したころに入会したようです。その後半の16年間を理事としてのお役目を頂戴し、2016年5月末をもって定年制により終わりを告げます。



本学会は、私の声楽家として、また指導者として研鑽を積む学び舎でありました。

戦後国交が復活して約20年が経ったころ、日本の口伝式による伝統的教育法がまだまだ根強く在り、個人の体験以外に頼るものがないに等しい教育法の実情を嘆いて、声楽の研究に避けては通れない発声学を本学会の理念に置き、行動を持って、お互いを高め、真実について忌憚なく語り合う、そんな学究者の集団を祈願して設立された、そんな新鮮なエネルギーが満つ満つしくみなぎっている時期に、私は入会したように思います。聞いたこともない医学用語を用いて発表される発声の仕組みを貪るように学びました(日本声楽発声学会40年史第一号発刊を祝して — 理事長 柴田睦陸先生 寄稿文より引用)。

設立後50年余りが経過した今日、目を見張る勢いで発声学の研究は進み、具体性を帯

び、しっかりとした基礎の上に個人の感性が相まって、世界に比肩して憚らない歌手が闊歩しておられる時代になりました。また教育法もどんどん高度化し、基礎技術も目覚ましい限りです。柴田先生は、天国より目を細めて祈願達成とまではいかないまでも、進んでほしい悲願の道程にあることは確かだと微笑んでいて下さればと願いたいです。

2013年に改革された本学会の会則に定年制が布かれ、学会設立に近い時期から会員として在籍、理事長あるいは理事として学会の充実と前進に尽力を注がれた先生方の多くが退かれ、重鎮がおられなくなった現理事会は、一つの転機が訪れ、組織全体の在り方も改革を迫られているように思います。理事を去るにあたり、本学会の基本姿勢を揺るがすことなく、世相のニーズに応えながら、新しい体制づくりを具体化して下さいますことを新理事会の皆さまに託したく思います。会員の皆さまと一丸のもと、50年の歩みが澁むことなく、ますますの充実と発展を祈願いたします。

理事の仕事を顧みて

理事 淡野弓子

2016年5月31日をもちまして、理事を退任させて戴くこととなりました。私は2010年に前会長 故・米山文明先生のご推薦により理事を拝命、2013年には選挙によってこの仕事に就くこととなり、在任中は演奏部門と国際部門の委員としての仕事を仰せつかりました。



演奏部門と致しましては、川村英司、豊田喜代美両理事と共に〈歌の集い〉を計画、2011年7月23日の第1回から2013年3月1日の第7回までを開催することが出来ました。2013年5月に川村英司理事が退任され、同年6月からは山本富美理事が加わって下さり、第8回から第10回までの演奏会を開催、いずれも活気溢れる〈歌の集い〉となりました。ひとつ残念であったのは、2016年3月8日に予定されていた第11回〈歌の集い〉が、応募者が定数に満たず開催不能となったことです。企画内容、実行の不手際を反省し、心よりお詫び申し上げます。来季は一会員として〈歌の集い〉を応援したいと思っております。

国際部門の委員としては、2010年～2015年米国ミネソタ州セント・ポールにお住まいの名声楽教師エリザベス・マニオン女史のレッスンで学んだエンリコ・デッレ・セディエ（1822～1907）の「声の技法」を学会例会の研究報告、夏季研修会の講座などで会員の皆様にお伝え出来ましたことを感謝しております。

私は合唱指揮者としてドイツ、ブラジル、アメリカ、日本で働き、さまざまな人種の声に触れて考えたことは、時と場所の制約を超えた「人間の声」の普遍的な法則を探りたいということでした。このテーマに関係する作品として柴田南雄作曲《宇宙について》を2014年9月14日、当学会創立50周年記念として演奏出来ましたこと、また来る5月29日の第103回例会「特別講演」に坂本長利氏の語りによる『土佐源氏』をご鑑賞いただく運びとなりましたことなどなど、いずれも理事会のご賛同を得て実現し、また企画進行中であることを嬉しく思っております。

長きにわたり理事各位および会員の皆様にお支え戴きご助力を賜りました。日本声楽発声学会が今迄にも増して地道且つ創造的な活動を続けられんことをお祈り申し上げ、感謝をこめてお別れの言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

川内澄江先生追悼

川内澄江先生を偲んで

会長 末 芳枝

本学会元理事・名誉会員でいらっしやいました川内澄江先生が平成27年12月25日にご逝去され、平成28年2月13日、藤原歌劇団と楡の会（門下生）の主催による「お別れの会」が東京都新宿区早稲田奉仕園スコットホールで開かれました。

先生は、第二次世界大戦中そして戦後の混乱の中で研究を続けられ、オペラを通じてヨーロッパの音楽と発声法を、ご自身で歌って日本に紹介された先駆者でいらっしやいました。常に発声法についてお話をなさり、この世を去る二週間前までご病床で歌われていらっしやったそうです。“声楽家の中の声楽家”でいらっしやいました。

門下生の歌声に送られて昇天された川内先生、当学会の為に、そして日本の声楽界のためにご尽力下さいました事を感謝申し上げますと共に、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。当学会を代表し、感謝と御礼を捧げて参りました事をご報告申し上げます。

川内澄江先生 お別れ会

会員 兒玉トキ子

2015年12月25日(金)早朝、川内澄江先生がご逝去されました。

平成16年2月13日(土)午後2時より、早稲田奉仕園スコットホールで、故川内澄江先生のお別れ会がしめやかに行われました。

藤原歌劇団、日伊協会、日本声楽発声学会の関係者、お弟子の会「楡の会」、他、各界の著名な方々、総勢200名が参列され、栗林義信先生、桑原瑛子先生、末芳枝先生(本学会会長)が川内澄江先生の思い出を語っていただきました。

また川内先生がお亡くなりなる2週間前に御撮りになった、歌劇「ジャンニ・スキッキ」私のお父様、イタリア民謡「帰れソレントへ」を朗々とお歌いになさっていらっしゃる映像が披露され開場は拍手喝采、生涯現役でいらっしゃった川内先生ふさわしい会となりました。

「楡の会」は、モーツァルト「アヴェ・ヴェルム・コルプス」、アンドリュウ・ロイド・ウェッバー「ピエ・イエズ」、マスカーニー「アヴェ・マリア」の演奏を披露しました。



ここからは私事ですが・・・昨年の12月22日から27日まで、京都の某教会の仕事をするために京都に滞在しておりました。24日が本番でしたので、25日に、川内先生の御声を聴きたく、ご連絡を差し上げましょうと心に決めておりました。

25日、滞在していますホテルのロビーの電話から先生のお宅にお電話をおかけしましたところ、お嬢様のえり子さまがお出になられました。「ご無沙汰をしております、ごだます」と申し上げますと、少し間をおかれ「兒玉さん・・・実は、今日の早朝 母は亡くなりました。23日でしたら、元気な母の声をお聞かせできましたのに」、「今日・・・母の声を聴きたくてお電話しましたと、兒玉さんを含めて3人の方々からお電話を頂戴しました・・・きっと母が呼んだのですね」・・・あまりの衝撃に言葉が出てきませんでした。こんなことがあるのかと・・・その場から動けなくなって・・・椅子にし

ばらく座っておりました。

20分ほど経って、フロントに電話の使用料の支払いに行きましたら、「あの電話で通話なさったのですか?!あの電話はファックス専用で、通話は出来ないのです。」、「でも話すことができましたよ」と言いますと、胸に落ちないフロントの係りが調べると「使用料100円とでしておりますね・・・こんなことがあるんですね」と話されていました・・・きっと川内先生が通話させてくださったのだと思っています。

部屋に入ると・・・パッチと言う音が何度も聞こえましたが・・・暖かく見守られているような・・・きっと今、ここに先生がいらっしやっているのが感じられました。「もうすこし早く先生にご連絡差し上げていましたら・・・」心の中で日頃の非礼を詫言しました。

お嬢様のえり子さんのお話で、10月ごろ川内先生が危篤になられました。また持ち直し、担当のドクター曰く「医学的見地から見ましても、御存命されていらっしやるのが奇跡なのだ」とのことでした。

お別れ会の当日、「楡の会」の演奏・・・最後の「アヴェマリア」は、先生とのいろいろな思い出が走馬灯のように思い出され・・・込み上げてきてしまって・・・歌えませんでした。

今、私があるのは、すべて川内先生のお蔭なのです・・・川内先生がいらっしやらなかつたらもちろん大申恩先生にもお会いできませんでした。

川内先生はアリゴ・ポーラ先生とご友人関係で、日本にいらっしやったときレッスンを受けさせてくださり、ポーラ先生は、楡の会の歌を聴いて感激され、私にも「イタリアへいらっしやい」と声をかけて下さいました。アリゴ・ポーラ先生は、3大テノールの一人、ルチアーノパヴァロッティを育てた先生です。

川内先生は、レッスンの時必ずテープを持参してレッスンを録音しなさいと仰っておられました。ゆえに、門下生は、必ずカセットテープを持参したものです。「アッポジャレ」「ティンプロ!」「ラッコリエーレ」、これらの言葉が、いつまでも 私の耳に響いております。

そして、とってお料理が上手で・・・その腕前はプロ級の腕前でした・・・レッスンの後、「食事していきなさい」、「お茶一緒にしましょう」・・・

また、先生とよく旅行もしました。発声学会軽井沢セミナーでは、丁度、同じくして軽井沢に避暑にいらっしやっていて、夏季セミナーの2日目の夕食は先生の滞在先のホテルに招待いただきまして・・・ディナーを毎回ご馳走になったものです。

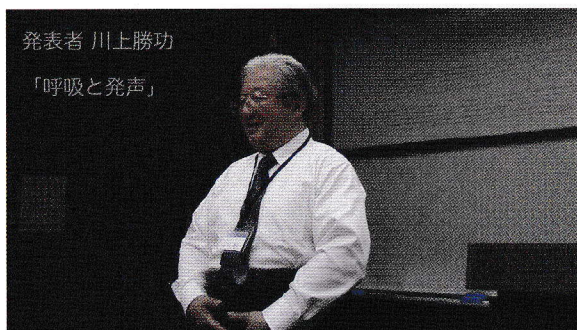
先生と過ごさせて頂いた事が、今、声楽に於いての私の血と肉になっております。

語りだせば思い出はまだいろいろありますが・・・先生へ感謝とご冥福をお祈り申し上げて結びといたします。

第102回例会フォトレポート



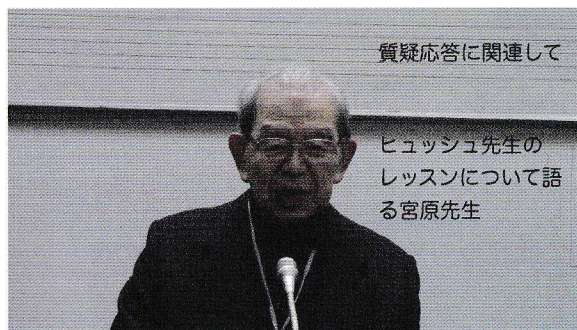
発表者 永井和子
「音声生理学の
学び方法かし方」



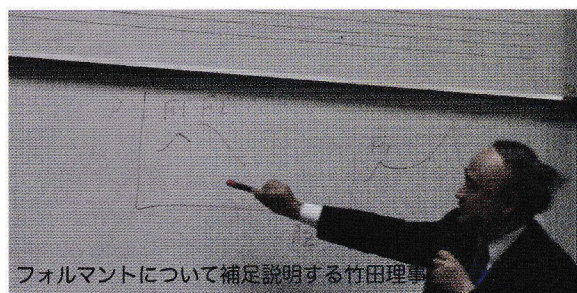
発表者 川上勝功
「呼吸と発声」



発表者 淡野弓子
「エンリコ・セディエ
『声の技法(Vocal Art)』
の語るもの」



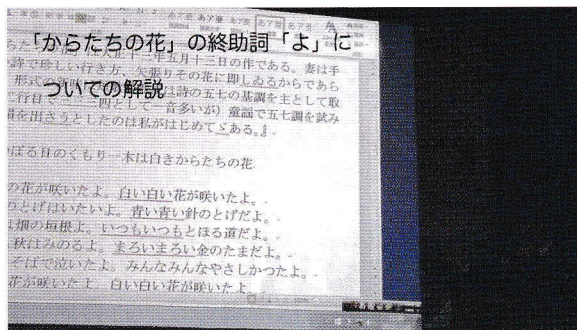
質疑応答に関連して
ヒュッシュ先生の
レッスンについて語
る宮原先生



フォルマントについて補足説明する竹田理事



特別講演 竹村忠孝先生
「耕苳&白秋からの贈りもの」

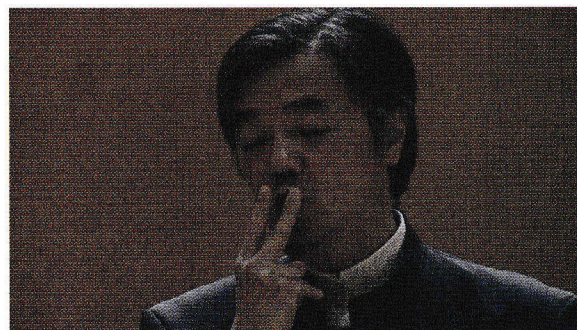


現役演奏家の演奏とお話 テノール 武田正雄

「フランス歌曲とそのアプローチ」



解説を交えながら歌っていただきました。



ベルカントを巡る

No.8 「ベルカントの判断基準」

河合孝夫



子供の頃こんな話を聞いた。
『昔、4人の盲人が象に触って、象とはどんなものかを語りあった。一人目は耳に触り「象とは大きな団扇のようなものだ」と言い、また二人目はお腹に触り「象とは壁のようなものだ」と言い、三人目は足に触り「象とは柱のようなものだ」と言い、四人目はしっぽに触り「象とは蛇のようなものだ」と言った』。これは、どれもある真実を語っているが、部分的な見方だけでは全体像を理解することができないという寓意である。

カストラートの時代が終わり、古典派、ロマン派と時代が進むにつれ、ベルカントという言葉が微妙に異なる目的で語られるようになり、一面的な解釈ですまない時代になってくる。例えば、ある人は発声や声の美しさについて語り、またある人は曲の様式について語る。また、ドイツ人がモーツァルトの様式や歌い方について語る時と、イタリア人がヴェルディの様式や歌い方について語る時では、当然のことながら同じベルカントでも内容が異なる。

我々は、ベルカントの育った文化の外にありながらそれを研究している団体である。現代は情報化の時代、昔と違い様々な情報を簡単に知ることができるようになった。だが反面、情報の多さに比べ全体像を把握するのがなかなか難しい時代でもある。このような時、世界の人々とベルカントに関して議論し、相手の言うことを理解したうえで、機に応じ意見のすれ違いなく議論を展開するには、ベルカント（美しい歌唱法）の育った歴史的背景を知り、何をもってベルカントとして讃えられるのか、その歌唱法の時代を超える判断基準を見つける必要があるのではないかと考えている。

さて、ベルカントの基本的概念は、紀元4世紀ローマ時代から千数百年の発展の時をかけ、バロック時代のカストラートによりほぼ完成されたと考える。この間スコラ・カントルム、コンセルヴァトーリオ等の教会の機関で合唱（声楽）・音楽が教育された伝統から、現代でもヨーロッパ各地の音楽院にその名が残り、また、美しい歌唱法は時代と国を

超えてベルカントの呼び名で呼ばれるようになった。

カストラートの卓越した独唱技術によって完成したベルカントは、およそ次のような判断基準を充たすことによって是とされるのではなかろうか。

- 1、「共鳴法」：胸声、頭声に関わらず、いかなる声区でもその声は頭部に共鳴したように聞こえる。
- 2、「発声の柔軟性」：広い音域を、ただ歌えるだけでなく、メリスマや装飾等を使い、その声は自由に軽やかに歌える発声の柔軟性がある。
- 3、「発音法」：どんな音高でも全ての母音を共鳴させて歌うことができ、その歌は自然な発音に聞こえる発音法で歌われる。
- 4、「メッサ・デイ・ヴォーチェ」：メッサ・デイ・ヴォーチェの技術により、その歌は音高や歌詞の発音に関わりなく自然なダイナミックスの変化で歌える。
- 5、「フレージング」：その歌は曲の最初から最後まで流れるようなフレージングで歌われる。この時、フレーズの「始まり」～「頂点」～「終り」は和音進行と重なり、和音進行は純正調の音程の考え方が重要な意味を持つ。

この判断基準は時代を超えて現代にもつながっており、優れた歌手の歌唱を思い浮かべると、彼らの歌が単に声の良さだけでなく、これらの条件を満たすことでベルカントとして讃えられていることに気づかれるであろう。また、この判断基準は、多くの声楽教師の指導法や声楽指導書のメソッドにも見つけることができ、声楽教育の基準としても使われている。そして、我々の練習の目標にもなっている。

ところで、ベルカントの判断基準ができると、その後の時代はこの判断基準に照らされて批判の対象となる。ある時はその美しさを讃えられるが、別の時には非難されることにもなる。そのため、モーツァルト以降の時代は、オペラの様式変化とともにしばしばベルカントの危機の言葉が聞かれるようになるのである。それらの話については次稿からお話することにしよう。

さて、この稿の結びにあたり、私は、最初に申し上げた寓話の中の一人の盲人であることを申し上げておかなければならない。そして、英邁な会員諸氏の忠告の投稿を切にお願いして、今回の文章の筆を置くことにする。

第103回例会ご案内

2016年(平成28年)5月29日(日)
9:55~16:20(受付9:30より)
東京藝術大学 音楽学部 大講義室・第6ホール

A 研究発表 (5-109大講義室)

①「合唱とソロの発声を考える」

虫明眞砂子(岡山大学大学院教授・本学会理事)

②「発声時に於ける喉頭の位置関係」

竹田数章(仙川耳鼻咽喉科院長・本学会理事)

川上勝功(日本大学芸術学部講師・本学会副会長)

B 総会(第52回総会)(5-109大講義室)

C 特別講演(5-109大講義室)

「独演劇『土佐源氏』(宮本常一 聞き書きによる
及びお話し)」

講師:坂本長利 (さかもとながとし)

D 現役声楽家の演奏とお話(第6ホール)

ソプラノ:丸山恵美子(まるやま えみこ)

ピアノ:大杉祥子

<特別講演>

坂本長利■独演劇『土佐源氏』のご紹介

理事 淡野 弓子

5/29(日)に開催される当学会の第103回例会「特別講演」(午後1時~3時)において、坂本長利氏による『土佐源氏』の公演とお話が予定されております。内容と坂本氏のプロフィールは例会プログラムに掲載されておりますので、そちらをご参照下さい。ここではこのような催しを学会の例会でご紹介する理由をお話ししたいと思います。

日本の歌唱芸術は実に多様で、その分野それぞれに独特の伝統的な発声があります。われわれが歌を歌う際、そのいずれかの発声か紛れ込んで、なんらかの色を感じる事も珍しくありません。私が坂本長利氏の語る日本語を伺って驚いたのは、そこには能、歌舞伎、浄瑠璃、長唄、落語、講談などなどで用いられている声の色というものが存在せず、ただひたすらに、そこで語っている人物の声がまるで野の風のように吹き渡り、周囲と一体化している稀有な音空間だったことです。

様式に固定されず、ただその人物を生きることによりのみ捧げられた坂本氏の精神と身体、そして声は、小賢しい小市民性を吹き飛ばし、どんな人間にも潜む根源的な生命を目覚めさせる力に溢

れています。真の芸術の持つ清々しさを皆様とともに味わう事が許されるなら、これほどの喜びはありません。86歳になられる坂本氏の公演は日に日に貴重なものとなります。どうかこの機会に是非ともご鑑賞戴きたく、心よりお奨め申し上げる次第です。

<現役声楽家の演奏とお話>

丸山恵美子氏のご紹介

副会長 川上 勝功

「現役声楽家の演奏とお話」では、国際歌手ソプラノの丸山恵美子先生をお迎えします。東京藝術大学及び大学院を修了後、イタリアへ留学。ミラノ・スカラ座オペラ研究所にて研鑽を積まれます。その後、ヴェルディ国際コンクール他、出場されたすべてのコンクールに優勝。「トロヴァトーレ」でデビュー以降、ウィーン、ミュンヘン等のヨーロッパの主要な歌劇場に招かれ、H. v. カラヤン、R. ムーティ等の第一級の指揮者とヴェルディのオペラを中心に、モーツァルトからベルカントオペラと幅広いレパートリーで国際的な活躍を重ねてこられました。素晴らしいオペラ歌手としての演奏とお話をご期待ください(演奏曲目は、「例会案内」をご参照ください)。

イベント案内

臨床音声学研究会東京

2016年5月28日(土)午後5時から午後7時
場所は東京渋谷東急本店裏 呼吸と発声研究所です。

(<http://www.att-yoneyama.com>)

会員で医師関係の人が中心に行っている研究会ですが、ご参加は自由です。
参加費は1,000円です。

参加希望者は5月23日(月)までに竹田まで
お願いします。(FAX 03-5313-3281)

会員だより

<演奏会報告>

泉恵得理事が、イタリアのミラノにおいて「冬の旅」の演奏会を開かれました。

期日:2016年3月19日 16:00 ~

場所:sala L.Matalon(foro Bonaparte67 Milano)

曲目:Shubert 「Winterreise」

主催:Notturmo Musica

Fondazione Luciana Matalon

助成:Comune di Milano

日本声楽発声学会 学会通信 第33号

事務局から

会費納入のお願い

今年度の年会費（正会員：10,000円、学生正会員：7,000円）の納入をお願いいたします。

暫定的に事務局へのお振込先は、下記に変更しております。加入者名は、本学会の事務局長名です

お振込先

ゆうちょ銀行

口座番号 00940-2-111375

加入者名 永井和子

過年度の年会費未納の方は早急にお振り込みくださいますようお願いいたします。その際、通信欄に「日本声楽発声学会」と、該当年度をご記入ください。なお、納入状況を確認されたい方は、事務局へメール、もしくはFAXでご連絡ください。

新入正会員の募集

皆様のお知り合いに、日本声楽発声学会に興味を抱いていらっしゃる方は、おられませんか。現在、正会員、学生正会員の入会を歓迎しております。「入会申込書」は、事務局の他、Webでもダウンロードできます。

「学会通信」投稿募集

「学会通信」では、会員の皆様からのご投稿をお待ちしております。投稿先は、事務局となっております。

事務局だより

事務局長 永井和子

学会通信第33号をお届けします。2013年6月より始まり、2016年5月末日をもって現理事会は3年間の企画運営のお役目を終えます。6月より新理事会が誕生します。心機一転、ますます充実した学会が展開されますことを期待してやみません。

この3年間には、恒例の例会、夏季研修会はもとより、本学会の設立50周年のための行事や事業、沖縄支部が開設されたり、といろいろなイベントに取り組んでまいりました。例会や、夏季研修会においては、常に斬新的にして、しかも本学会の意図とする発声研究の基本を軸にした研究発表や特別講演、現役演奏家紹介等、会員の皆さまの前向きな姿勢と真摯な享受の熱意に応えるべく種々企画に心配りしてまいりました。

理事が丸一となり役目を果たすべく努力を惜しまず行ってまいりましたが、至らぬことが多々あったことをご寛容にご容赦くださいますようお願い致しますと共に、引き続き会

員の皆さまのご指導とご協力をお願い申し上げます。

「川内澄江先生追悼」に兒玉トキ子会員から追悼文を、「会員からの投稿」に河合孝夫理事から「ベルカントを巡るNo.8」を投稿くださいました。ありがとうございました。

編集後記

理事 鈴木慎一郎

鳥取大学の私の研究室の窓の前には、ソメイヨシノの木が植わっています。この編集作業をしています3月下旬の頃、ピンク色に膨らんだつぼみが、少しずつ咲き始めました。

山陰地方は、冬場は雪や曇りの日が続きます。今年は暖冬で雪が少なかったものの、春の訪れは、やはりうれしいものです。

出会いの春でもあります。学会を通して、多くの方と出会い、研鑽していきたいと思っております。



編集後記（増補改訂版）

幹事 相川修一

増補改訂版、いかがでしたか。できることなら最初からこの版でお届けしたかったところですが、力及ばず申し訳ありませんでした。西村元事務局員から引き継いで作成しはじめて6年近く経とうとしています。難しい船出ではありましたが、会員みなさんに励まされながらなんとかやってきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。機会があればまた編集に携わってみたいと思っておりますが、当面は会員として勉強に集中しようと思っております。



2016年4月20日（初版）

2016年5月29日（増補改訂版）

日本声楽発声学会 学会通信 第33号

発行人 末芳枝

編集人 鈴木慎一郎（初版）

相川修一（増補改訂版）

発行 日本声楽発声学会事務局

〒241-0002 神奈川県横浜市

旭区上白根1-5-552 小関 方

TEL/FAX 045-952-3813

e-mail :jars@jars-voice.com

HP: <http://www.jars-voice.com>